A Generative-Transformational Study of Negation

日英語の否定の研究

広島大学助教授

岩倉国浩著

東京 研究社 出版

KENKYUSHA

〈検印省略〉

日英語の否定の研究

1974年10月20日　初版発行
1978年 6 月10日　再版発行

著　　者　岩倉国浩
発行者　近藤　繁
発行所　研究社出版株式会社
東京都新宿区神楽坂1ノ2(〒162)
電話　東京 (03) 269-4521 (代)
印刷所　研究社印刷株式会社
製本所　新栄社製本所

3082-401048-1860

はしがき

本書は，1971–72年にかけて準備し，1973年3月16日にミシガン州立大学言語学科に提出した学位論文 *A Generative-Transformational Study of Negation: A Contrastive Analysis of Japanese and English* を日本語に直し，多少，加筆，修正したものである．特に，学位論文と本書が大きく違うところは，学位論文は，日本語から入っていって，次に，その分析を英語に当てはめるという順序であったものを，本書では，逆に，英語から入っていって，その分析が日本語にも適用可能であることを示すという手順をとっていることであるが，本書の目的のひとつである日英両語に適用可能な否定の分析を提示するという観点から言えば，どちらをとっても，論旨に直接影響を与えるものでないことは言うまでもない．その他，小さな加筆，修正は，主として注に入れてある．

本書の構成は5章からなり，1章は，最近の生成変形文法理論による否定の研究を概観し，その問題点を指摘する．2章では，否定を数量詞との関係において考察し，われわれの否定の分析を提示する．この分析が，今まで未解決であったいくつかの問題を解決できるだけでなく，否定と数量詞が互いに関係するいくつかの型の文をうまく説明できることを示す．3章で，否定と4種類の副詞との関係を考察し，2章で提案した否定の分析がこれらの副詞を含む場合にも適用できることを，日英両語について示していく．4章では，否定詞搬送変形に関する問題をわれわれの否定の分析のわく組み内で取り扱うが，特に，否定詞搬送変形には，いくつかの問題点があることを指摘し，それらの問題点がわれわれの分析ではどのように解決されるかを見ていく．5章は，本書で行なった考察の簡単なまとめである．本書では，このような順序で否定の諸相を論じていくが，特に，本書の主たる目的は，日英両語に適用可能な否定の分析を提示することである．

本書の母体となった学位論文を書き上げるまでに，数多くの人々のお世

話になった．特に，ミシガン州立大学の言語学および日本語担当教授 Seok C. Song 博士には，終始，あたたかい励ましと熱心なご指導を賜わった．また，Julia S. Falk 教授の助言がなかったら，小生の学位論文はあのような形ででき上がらなかったであろうと思われるほど，数多くの有益な助言を同教授から受けた．さらに，Ruth M. Brend 教授，John T. Ritter 教授，John B. Eulenberg 教授にも，ひとかたならぬお世話になった．なお，Donald J. Calista 教授，John B. Brattin 弁護士ご夫妻，John R. Barnett 氏は，英語のインフォーマントとして，数々の有益な助言を与えて下さった．これらの人々のご指導，助言がなかったら，本書の母体である学位論文は完成しなかったであろうし，したがって，本書も，こうして日の目を見ることができなかったであろう．これらすべての人々に，心からの感謝をささげたい．

巻末に，本書に関係のある術語の簡単な解説をあげてあるが，この作製には，安井稔教授(編)の『新言語学辞典』に負うところが多い．ここにしるして，感謝の意を表明したい．

1974 年 9 月

岩倉国浩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　　次

はしがき iii

1. 序　　説 1

§1.1. 解釈意味論分析 対 生成意味論分析 1
§1.2. 解釈意味論分析と生成意味論分析の問題点 3
§1.3. 本論の目的 7
§1.4. 本論の輪郭 9

2. 否定と数量詞 13

§2.1. 英語の否定詞の及ぶ範囲と数量詞の及ぶ範囲 . . . 13
§2.2. 英語の否定の分析 21
§2.3. 英語の数量詞の分析 37
§2.4. 未解決の問題の検討 47
§2.5. 日本語の否定と英語の否定の相違 68
§2.6. 日本語の否定詞の及ぶ範囲と数量詞の及ぶ範囲 . . 71
§2.7. 提案された英語の否定の分析の日本語への適用 . . 79
§2.8. 提案された英語の数量詞の分析の日本語への適用 . 96
§2.9. 英語の否定の分析と日本語の否定の分析の比較 . . 104
§2.10. 2章の結論 113

3. 否定と副詞 125

§3.1. 否定と名詞句副詞 125

§3.1.1. 英語の否定と名詞句副詞 126
§3.1.2. 日本語の否定と名詞句副詞 139
§3.2. 否定とひん度の副詞 147
§3.2.1. 英語の否定とひん度の副詞 147
§3.2.2. 日本語の否定とひん度の副詞 158
§3.3. 否定と理由と目的の副詞 163
§3.3.1. 英語の否定と理由と目的の副詞 163
§3.3.2. 日本語の否定と理由と目的の副詞 175
§3.4. 否定と様態の副詞 186
§3.4.1. 英語の否定と様態の副詞 186
§3.4.2. 日本語の否定と様態の副詞 198
§3.5. 3章の結論 206

4. 否定詞の上昇 215

§4.1. 否定詞搬送変形の問題点 215
§4.2. 否定詞上昇変形を使うわれわれの分析 218
§4.3. われわれの分析の利点 224
§4.4. 日本語の否定詞搬送変形とわれわれの分析 250
§4.5. 日本語におけるわれわれの分析の利点 256
§4.6. 4章の結論 279

5. 結 論 293

参考文献 301
術語解説 307
索 引 317

1

序　　説

最近数年間における変形文法理論の進展はめざましいものがあるが，否定と数量詞の研究においても，いくつかの重要な研究がある．たとえば，Jackendoff (1969, 1971, 1972), Partee (1970), G. Lakoff (1969, 1970a, 1970b, 1971a), Carden (1970a, 1970b, 1970c, 1973) などである．これらの研究により，否定と数量詞の相互関係が，これを含む文の意味解釈に重要な関連をもっていることが明らかになった．これらの研究は，一部は，Jackendoff, Partee などの解釈意味論者 (interpretive semanticist) と G. Lakoff, Carden などの生成意味論者 (generative semanticist) の間の論争によって，生まれたものである．

本論では，同じ問題を別の観点から論じるが，特に，英語にも，日本語にも，適用可能な否定の分析を提案しようとするものである．これまで提案されてきた分析は，英語だけに限ってみても，いずれも不十分であることはもちろんだが，これを日本語に適用可能かどうかという観点から見ると，これらの分析が不備であることが，いっそう，はっきりする．この点を明らかにするために，まず，最近の変形文法理論による否定と数量詞の研究を簡単に見ていきたい．

§1.1.　解釈意味論分析 対 生成意味論分析

Jackendoff や Partee は，否定と数量詞の意味的関係を意味解釈規則 (semantic interpretation rule) を使って説明しようとする．特に，Jackendoff は，否定詞と数量詞を含む文の意味解釈は，否定詞と数量詞が，表層構造で，どちらが先行するかという両者の相対的位置によって決定でき

る，と言う．ここで，Jackendoff (1969) から実例を1つ，少し変更を加えて,[1] 引いてみよう．

(1.1) *Not many* arrows hit the target. (多くの矢がまとにあたったわけではない)

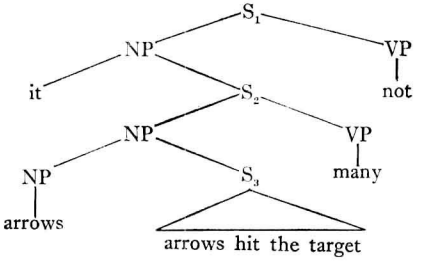
(1.2) *Many* arrows did *not* hit the target. (多くの矢がまとにあたらなかった)

(1.3) It is *not* so that *many* arrows hit the target. (多くの矢がまとにあたったわけではない)

Jackendoff は，文(1.1)は文(1.3)と同義であるが，文(1.2)は，文(1.1)とも，文(1.3)とも，同義ではない，と言う.[2] そして，この意味の相違は，表層構造における *not* と *many* の相対的位置の違いによるものである，と言う．すなわち，文(1.1)では，*not* が *many* に先行しているが，文(1.2)では，*many* が *not* に先行している．この分析を，解釈意味論分析と呼ぶことにする．

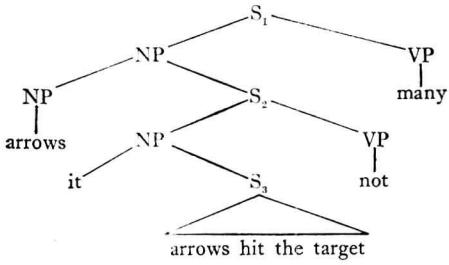
一方，G. Lakoff や Carden は，否定詞と数量詞は，基底構造で，上位の文の動詞として生成され，文(1.1)と文(1.2)の意味の違いは，基底構造において，*not* と *many* のどちらがより高い文にあらわれるかという，文の高さの相違によって説明できる，と言う．すなわち，文(1.1)の基底構造では，*not* が *many* よりも高い文の中にあらわれ，文(1.2)の基底構造では，*many* が *not* よりも高い文の中にあらわれる．したがって，この分析によれば，文(1.1)と文(1.2)は，次の(1.4)と(1.5)のような異なった基底構造から，それぞれ，生成されることになる．

(1.4)



文(1.1)を(1.4)から派生したり，文(1.2)を(1.5)から派生したりするには，G. Lakoff の言う，数量詞下降変形 (Quantifier-lowering) の適用が

(1.5)



必要である．この変形は，数量詞を（そして，たぶん，否定詞も[3]）低い文の中に下降させるもので，たとえば，(1.4)の *many* と *not* を S_3 の中に，1度に，1つずつ，組み入れることによって，文(1.1)を派生する．この分析を，生成意味論分析と呼ぶことにする．

§1.2. 解釈意味論分析と生成意味論分析の問題点

上で2つの分析を紹介したが，このどちらの分析も，いくつかの問題を未解決のまま残していることに気がつく．まず，解釈意味論分析は，次のような問題を解決しなければならない．

A. 表層構造における否定詞と数量詞の相対的語順を使っての解釈意味論分析を受け入れるとすると，受身変形 (Passivization) や話題化変形 (Topicalization) が「変形は意味を変えない」という変形の大前提を破ることになる．たとえば，Jackendoff (1969) から引用した次の例を見てみよう．

(1.6) (=1.1) *Not many* arrows hit the target.（多くの矢がまとにあたったわけではない）

(1.7) (=1.2) *Many* arrows did *not* hit the target.（多くの矢がまとにあたらなかった）

(1.8) The target was *not* hit by *many* arrows.（まとに多くの矢があたったわけではない）

まず気づくことは，文(1.7)の基底構造に受身変形を加えれば，文(1.8)が生成されるわけであるが，困ったことに，文(1.8)は文(1.7)と同義ではなく，文(1.6)と同義である．すると，この場合，文(1.7)の基底構造

から文(1.8)を生成する受身変形は，意味を変えてしまう変形ということになる．

同様の例として，再び，Jackendoff (1969) から多少の変更を加えて引用した，次の例を見てみよう．

(1.9) The police did *not* arrest *many* demonstrators. (警察は多くのデモ参加者を逮捕したわけではない)

(1.10) *Many* demonstrators were *not* arrested by the police. (多くのデモ参加者が警察に逮捕されなかった)

(1.11) *Not many* demonstrators were arrested by the police. (多くのデモ参加者が警察に逮捕されたわけではない)

もし，受身変形が文(1.9)の基底構造に適用されると，派生される文は，(1.11)ではなくて，(1.10)である．しかし，(1.9)と同義な文は，(1.10)ではなくて，(1.11)である.[4] このように，この場合も，受身変形は意味を変えてしまう．さらに，文(1.11)に対応する能動文はどのように派生されるのであろうか．もし，文(1.9)と文(1.10)が受身変形によって関係づけられるとすれば，文(1.11)の能動文はどのようなものであろうか．ここで，たとえば，Klima (1964) の分析に従って，(1.10)に，Klima の言う，否定詞編入変形 (Negative-incorporation) を加えて (*not* を *many* に編入して)，文(1.11)を派生することができるかもしれない．しかし，この分析の問題点は，文(1.11)は文(1.10)と同義ではないから，文(1.10)の基底構造から文(1.11)を派生する否定詞編入変形は意味を変えてしまう変形である，ということである．

次に，話題化変形に関係するものとして，次のようなものを見てみよう．

(1.12) (=1.9) The police did *not* arrest *many* demonstrators. (警察は多くのデモ参加者を逮捕したわけではない)

(1.13) *Many* demonstrators, the police did *not* arrest. (多くのデモ参加者を警察は逮捕しなかった)

文(1.12)の基底構造に話題化変形を加えると，文(1.13)が生成されるが，問題は，(1.13)は(1.12)と同義ではないことである．すなわち，この場合，文(1.12)の基底構造から文(1.13)を派生する話題化変形は，意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

味を変えてしまう変形である.

変形に加えられた「変形は意味を変えない」という条件をゆるめることは，明らかに，変形の記述能力を高めることになり，それは，とりもなおさず，変形文法理論の欠点をより大きくしてしまうものであろう.[5]

B. G. Lakoff (1969) が指摘したように，否定詞と数量詞の表層構造における相対的位置による解釈意味論分析には，いくつかの反例 (counter-example) が存在する. 最初の主要な型の反例は，次のようなものである.

(1.14) The arrows that did *not* hit the target were *many*. (そのまとにあたらなかった矢が多かった)

G. Lakoff は，文(1.14)では，*not* が *many* に先行するのに，文(1.14)は，文(1.7)と同義であって，文(1.6)と同義でないことを指摘した. さらに，彼は，文(1.14)では，*many* が *not* のうしろにくるが，*not* より高い文の中にあって，この文の基底構造で，*many* は *not* を統御している (command)，と言う. この *many* と *not* の間の「非相称的統御関係」(“asymmetric command relationship”) が，文(1.14)と文(1.7)との同義性，並びに，文(1.6)との意味の相違を説明する，と言う.

2番目の重要な型の反例は，(1.15)のようなもので，数量詞に強勢がおかれる場合である.

(1.15) *Many* men read *few* books. (ほとんどの本は多くの人が読まない)

文(1.15)では，*many* が *few* に先行しているが，*few* に強勢がおかれているため，文(1.15)の意味解釈は，*few* が *many* をその範囲の中に含む解釈となる. すなわち，文(1.15)は，*The books that many men read are few* (多くの人が読む本はほとんどない) と同義である. したがって，否定詞と数量詞または2つの数量詞の表層構造における相対的位置を使っての解釈意味論分析は，これらの反例を説明できるように修正されなければならない.

一方，G. Lakoff が提案した数量詞下降変形を使っての生成意味論分析には，次のような未解決の問題がある.

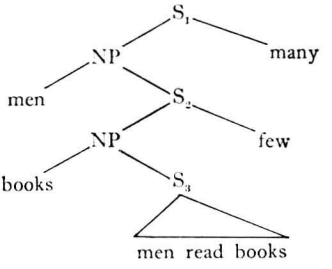
C. 数量詞下降変形は，Chomsky (1972, 184–185) が指摘したように，変

形に対する，おそらく，普遍的と思われる制約を破っている．この制約とは，「どんな変形も，埋め込み文の句の中に，その埋め込み文の外から語句をそう入することはできない」というものであるが，上ですでに見たように，数量詞下降変形は，数量詞を埋め込み文の句の中に組み入れる変形であるから，この制約を破る変形であることは明らかである．

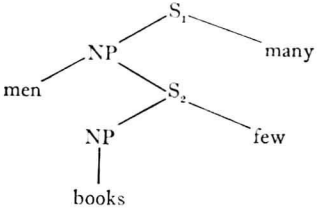
D. 上の(1.4)や(1.5)のように，否定詞と数量詞が高い文の動詞としてあらわれる基底構造は，Chomsky (1972, 182–183) によって指摘されたように，他に例のない，特殊なものである．たとえば，文(1.16)は，おおむね，(1.17)のような基底構造をもっている，ということになるであろう．

(1.16) Many men read few books.

(1.17)



(1.18)



ところで，(1.17)から S_3 を取った構造(1.18)を考えてみよう．(1.18)は，このままでは不完全な構造で，S_2 の *books* に関係詞節が付けられて，はじめて構造として完全になる．さらに，この *books* に付けられる関係詞節は，(1.18)にあらわれる2つの名詞句，すなわち，*books* と *men* を含んでいなくてはならない．その上，(1.18)で，S_2 は *men* を

先行詞とする関係詞節であるはずなのに，S_2 の中にはその先行詞 *men* と同一の名詞句があらわれていない．このような特殊な構造は他に例を見ないものであり，したがって，このような特殊な関係詞節を含む(1.17)のような基底構造は，その場限りの (ad hoc) 構造と言わざるをえないわけである．

しかも，(1.17)に数量詞下降変形が適用されると，*few* と *many* が1度に，1つずつ，S_3 におろされるだけでなく，先行詞の *books* と *men* が，1度に，1つずつ，消去され，その結果，S_2 と S_1 が消去されることになる．このように，主文が消去されて，埋め込み文が消去されずに残るという派生は，他に例を見ないものであり，それは，(1.17)のような基底構造も，数量詞下降変形も，どちらも(1.16)のような数量詞を含む文を説明するためにしか使われない，その場限りのものであることを示している．

E. 上の(1.17)のような基底構造と数量詞下降変形を使う G. Lakoff の生成意味論分析は，従来の変形規則のほかに，より強力な型の規則である派生制約 (derivational constraint) を必要とする．これは，変形規則の記述能力を制限しようという方向とは逆の方向である．

以上，われわれは，否定と数量詞の解釈意味論分析と生成意味論分析について，それぞれ，未解決の問題が残っていることを指摘したが，これらの問題点は，このどちらの分析もまだ不十分であることを示している，と言えよう．

§1.3. 本論の目的

上で，最近の変形文法による否定と数量詞の分析として，主要な2つの分析——解釈意味論分析と生成意味論分析——を概観し，そのどちらの分析にも問題があることを指摘した．そして，上の議論は英語に限ってのことであった．

これに加えて，ここで，上の分析が，英語だけでなく，日本語に適用できるかどうかという観点から見ると，解釈意味論分析には，もう1つ，別の欠点があることを指摘することができる．すなわち，日本語では，次章

で詳しく考察するように，否定詞は，文尾に，動詞のうしろにくるのが普通であるが，その結果，表層構造では，数量詞が常に否定詞に先行することになる．そこで，表層構造での否定詞と数量詞の相対的位置を使っての解釈意味論分析は，日本語の否定詞と数量詞には全く適用できないことになる．このことは，解釈意味論分析にとって，明らかに不利な事実であろう．

そこで，本論の目的であるが，それは，§1.2. で指摘したような問題点を解決するだけでなく，日英両語の相違にもかかわらず，英語にも，日本語にも，適用できるような否定の分析を提示することである．

ところで，われわれの分析が英語と日本語の両方に適用可能であるかどうかということは，どういう意義をもつのであろうか．変形文法理論では，究極の目標のひとつは，各言語に対して記述的妥当性 (descriptive adequacy) をもった文法を選択することを可能にするような，説明的妥当性 (explanatory adequacy) をもった言語理論を作りあげることである．したがって，この文法の選択のために，問題は，可能な文法の種類を十分にせばめられるような，豊かな構造をもった一般言語理論を作りあげることである．そこで，われわれの研究は，一般言語理論を豊かにし，個別文法を簡潔にする方向にもっていくのが望ましいわけである．この見地からすると，2つの言語に適用可能な規則は，1つの言語に適用可能な規則より，重要である．なぜなら，2つの言語に適用可能な規則は，個別文法ではなく，一般言語理論に関係のある言語普遍的規則になる可能性がより高いからである．さらに，もし，ある規則が言語発生的に関係のない2つの言語に適用可能であれば，それは，言語発生的に関係のある2つの言語に適用可能な規則より，いっそう言語普遍的な規則になる可能性が高くなるであろう．まさに，ここに，われわれの分析が日英両語に適用可能であることの意義がある．英語と日本語は，世界のどの2つの言語がそうであるよりも，言語発生的に，無関係である．したがって，日英両語に適用できる分析は，英語だけに適用できる分析よりも，他の言語に適用できる可能性がより高いことは明らかである．さらに，そのような分析に含まれる規則や制約 (constraint) のあるものは，言語普遍的である可能性も高くなるであろう．

いまひとたび，くり返すと，本論の目的は否定の諸相を論ずることであ

るが，特に，日英両語に適用可能な否定の分析を提案することである．

§1.4. 本論の輪郭

本論の輪郭は，だいたい，次のとおりである.[6] 第2章では，否定と数量詞の相互関係について考察する．この議論は，否定詞と数量詞の及ぶ範囲 (scope) について，言語普遍的と思われる次のような2つの制約に基づいている．

(1.19) 否定詞の及ぶ範囲は，基底構造で，その否定詞があらわれる文の中だけである．

(1.20) 数量詞の及ぶ範囲は，基底構造で，その数量詞があらわれる文の中だけである．

次に，われわれは，英語の否定を数量詞との関係において考察し，否定の分析を提案する．特に，われわれは，2つの型の否定——文否定 (sentential negation) と動詞句否定 (verb-phrase negation)——を区別する．そして，われわれの提案する否定の分析はいくつかの変形を含んでいるが，それらは，いずれも，英語の文法において，どのみち必要な，独立の動機づけ (independent motivation) をもっている変形であることを示す．次に，この否定の分析が，今まで未解決であった問題を解決できるだけでなく，否定と数量詞が互いに関係するいくつかの型の文をも，うまく説明できることを例証する．このように，われわれの提案する分析が英語の否定をうまく説明できることを示したあとで，次に，われわれは，この分析が日本語の否定にも適用できるものであることを，いくつかの具体例を引用しながら実証していく．それによって，この分析の妥当性が再確認されることになる．

第3章では，否定に関係して，4種類の副詞を考察する．まず，これらの副詞が，否定に関して，数量詞とよく似た統語的性格をもっていること，すなわち，これらの副詞と否定詞が共起する文は，これらの副詞が否定詞の及ぶ範囲内にあるかないかによって意味の相違を示すことに着目して，われわれは，2章で提案した否定の分析が，数量詞の代わりにこれらの副詞を含む場合にも適用できることを示し，この分析の一般性が高いことを示す．それに加えて，様態の副詞に関して，われわれは，言語普遍的

と思われる次のような制約を提案する.

(1.21) 様態の副詞は，動詞句否定と共起できない.

もし，この制約が正しければ，これは，われわれの提案した文否定—動詞句否定という2つの型の否定の区別を支持する，新たな証拠にもなるものである.

次に，否定に関する4種の副詞の分析は，日本語にも全く同様に適用可能であることを，いくつかの例とともに示していく．それによって，われわれの分析の妥当性を，再び，確認することになる.

第4章では，われわれの否定の分析のわく組み内で，否定詞搬送変形(Negative-transportation)に関する議論を行なうが，特に，否定詞搬送変形は，このままでは不備で，われわれの提案する否定詞上昇変形(Negative-raising)の形に修正されねばならないことを示す．特に，われわれの分析は，否定詞搬送変形では説明できないような場合，すなわち，*NP think(s)* $[X—not—Y]_S$ 型の文と *NP do(es) not think* $[X—Y]_S$ 型の文が同義でない場合や，一方が文法的で，一方が非文の場合をも，この2つの型の文が同義である場合と全く同じやり方で説明できることを例証する．すなわち，この2つの型の文が互いに同義であろうがなかろうが，文否定と動詞句否定の区別を使うことによって，統一的に説明できることを明らかにする．そして，これは，英語だけでなく，日本語にも当てはまる分析であることを，実例を引用しながら示していく.

第5章は，本論で行なった考察の簡単なまとめである.

第1章の注

1. この変更は，*many (of the) arrows* の *of the* を取ったことを意味する．これは論点に関係のない変更であることは，言うまでもない．ちなみに，Chomsky (1971a, 207) も，Jackendoff (1969) から引用した例として，*of the* のない次のような形を使っている.

(77) (i) not many arrows hit the target
(ii) many arrows didn't hit the target

全く同様に，Chomsky (1972, 188) は，*of the* のない形を引用して，次のように言う.

Looking at the matter more closely, consider Jackendoff's sentences

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com